

片平博文 著

『貴族日記が描く京の災害』

思文閣出版 2020年3月 416頁 5,000円＋税

2011年3月に発生した東北地方太平洋沖地震から10年が経ち、近年においても毎年のように全国各地でさまざまな災害に見舞われている。そのたびに心が締め付けられる。「過去の悲惨な災害教訓を忘れない、語り継ぐ。素朴な方法ではあるが、これは私たちにできる最も有効な防災・減災行動の1つなのである」(385頁)と著者は本書の中で語っている。立命館大学の歴史地理学・地誌学を牽引してこられた著者は、2004年以降、文部科学省の21世紀COEプログラム「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」とグローバルCOEプログラム「歴史都市を守る「文化遺産防災学」推進拠点」の2つの大型プロジェクトに従事され、約15年にわたり「歴史災害」をテーマにさまざまな論考を世に出してきた。その主な研究成果として『京都の歴史災害』<sup>1)</sup>や『災害の地理学』<sup>2)</sup>が挙げられ、まさに歴史災害研究の発展に貢献してきたと言っても過言ではない。

本書を手にとると、カバー図版として、表には藤原定家の『明月記』、裏には『延喜式』巻42の「左京図」部分が掲載され、書名にもあるように「日記」と「京(みやこ)」のイメージが目に入ってくる。カバーのそでには「繰り返し起こる自然災害。これほど多くの災害が起きた場所に拘わらず、なぜ人々は京の都に住み続けたのだろうか。そればかりか、なぜ被災後には速やかに都市を復旧・復興させ、以前にも増して発展させることができたのか。本書は、平安・鎌倉期の貴族の日記から平安京の季節災害とその要因(火事、洪水、旱魃、台風)を抽出し、文字情報を歴史地理学の手法で空間情報に置き換えて視覚化することで、日記をただ読むだけでは見えてこない平安京の姿を浮かび上がらせる。これは、千年を超える都に残された、現代人への貴重なメッセージである。」と、本書の内容(著者の想い)がわかりやすく記載されている。

本書には図版一覧が設けられていないが、地図(絵図・天気図・断面図を含む)51点、グラフ29点、表18点、絵巻4点、概念図1点、結論図1点の計104点が掲載され、そのすべてがオールカラー

であることが最大の特徴といえよう。本書416頁のうち107頁に「どこでどのような災害が発生したのか」を視覚的にわかる精細かつ精彩な図版が散りばめられており、多くの時間を費やして作成されたようすがその一つ一つから窺える。評者は1994年に刊行された『京都歴史アトラス』<sup>3)</sup>を初めて手にした時のように、「京都災害アトラス」ともいうべき本書の豊富な図版に惹き込まれた。

また、専門書では発表論文をもとに「論文集」のような形で構成される場合が多く、本書においても11編の既刊論文をもとにしているが、「あとがき」に「これまで発表してきた自分の論文を集めて、単にそれらをコンパイルしただけの本にはしたくなかったので、本書の趣旨に沿っていくつかの章を新たに書き下ろした。」(384頁)との記述がみられるように、構成・内容にも専門外の読者への気配りが感じられ、安心して第1編から読み進めることができる。こうした配慮は、著者が20数年にわたり、高等学校用教科書の執筆に携わった経験によるものと思われる。

本書の構成は以下のとおりである。

はじめに

第1編 歴史時代の災害に学ぶ

—平安の京に残された記憶から—

第1章 京都で描く歴史時代の災害

第2章 歴史災害のとらえ方

第2編 京の人びとを震撼させた「火」の連鎖

第3章 火災の季節と恐るべき火の威力

第4章 市街地の3分の1を一気に焼き尽くした大火災

第5章 鴨川を越えた火災

—建長元年三月二十三日の大火—

第3編 「水」の襲来と京を流れた河川

第6章 洪水の季節と歴史

—8世紀末～14世紀末の記録から—

第7章 白河法皇と「賀茂河の水」

第8章 平安京北郊における有栖川の流れ

第9章 12～13世紀における平安京北辺の風景とその変化

—西洞院川と「小川」との関係—

第10章 同時に溢れた京域内の河川

—貞和五年(1349)における堀川および鴨川の洪水—

- 第4編 京を直撃した「風」の猛威
- 第11章 京を襲った歴史時代の台風  
—9～14世紀のデータベースから—
- 第12章 京を歴史に残った個性的な台風  
—個別の台風からの分析—
- 第5編 京の災害と被害に学ぶ知恵
- 第13章 激しい「水」と「旱」の相克  
—洪水と旱魃との関係—
- 第14章 終わりなき災害への対応と都市祭礼
- 第15章 歴史時代の災害から何を学ぶか？  
—終章に代えて—

あとがき

以上のように、本書は5編構成からなり、「火」「水」「風」の災害についてそれぞれ個別に検討がなされている。本書の冒頭では、日本の持つ四季・季節変化のなかで繰り返される災害や近年の深刻な災害に触れた上で、「時代によって、被災の程度にはやや違いがある」というものの、過去の災害の実態やそれを経験した人びとの生の記録・行動を分析することは、現代の災害を考える上でも極めて重要な課題」(viii頁)と述べている。本書の目的の1つは、「日記など歴史時代を通じて書き継がれてきた文字資料(史料)を主要な手がかりとして、それを歴史地理学の手法によって空間的な情報に変換し、歴史的な過去の空間で間違いなく頻繁に起きていた災害の実態と、復旧に向けての人びとの努力の軌跡を追い求める」(ix頁)ことにある。

第1編「歴史時代の災害に学ぶ」では、まず本書で扱う資料(史料)について言及している(第1章)。平安時代以降の京都やその周辺地域で発生した災害については、『日本後紀』以降の『六国史』や貴族らによって書かれた数多くの日記、寺社史、一部の文学作品、近世では武士や庶民によって書かれた日記や紀行文などを手がかりに、かなり詳しい実態を知ることができると紹介している。また、災害の実態を具体的に把握するために、代表的な「災害史料集」を挙げつつ、近年東京大学史料編纂所によって作成された「東京大学史料編纂所データベース」の活用事例を示している。歴史災害に関する調査・研究を行う際の基本となるのが災害データベースの構築であり、オリジナルな概念図をもとにデータベースの作成と利

用、研究の流れについて説明してあるのはわかりやすい。

次に、歴史災害のとらえ方について、京の災害の実態解明、「見える化」を図るために、歴史地理学の考え方を応用した4つの方法を説明している(第2章)。1つ目は「災害によって生じた現象の範囲や位置関係を探る」方法である。藤原定家自身が目にした深夜の火災のようすを『明月記』の記録から読み取り、空間情報に変換して現在の地形図に重ねて表現することで、焼失区域(範囲)のみならず、災害の深刻度までわかることが示されている。2つ目は「オーバーレイ(重ね合わせ)によって災害や災害範囲の傾向を探る」方法である。ある期間における被災域の記録をもとに、1つ1つを平安京条坊の町割の中に復原してポリゴンデータ(面データ)を作成し、それらすべてを一度に同じ空間(平安京)の中に重ね合わせること(オーバーレイ)によって、火災の時空間的な発生傾向を探るというものである。この方法はGIS(地理情報システム)を用いることで可能となり、具体例として、12・13世紀における京域とその周辺の被災回数(地図)などが提示されている。3つ目は「異なる時間軸の別情報と関連させて災害の実態を探る」方法である。9世紀半ばに発生した堀川などの洪水を事例に、『日本文徳天皇実録』のほか、『伊勢物語知願集』や『枕草子』などの異なる時代に作成された災害とは別の情報と関連させることによって、これまで知り得なかった新しい事実が浮かび上がることが示されている。4つ目は「災害から過去の空間の意味を探る」方法である。上記の1から3の方法とは逆に、先に災害の実態を把握し、得られた結果から空間の持つ意味を探るというものである。具体例として長保元(999)年と天徳4(960)年に発生した内裏火災を取り上げ、両者を詳細に検討することで、当時の空間の持つ意味を探ることが可能としている。

著者は「実際の災害分析は、上記1～4の方法を1つずつ個別に使い分けるのではなく、その複数または全部を組み合わせることによって進めて行くのが常道である」(47頁)とし、第2編以降の実証研究に導入されている。ここまで見てきたように、第1編の内容は歴史災害に取り組む研究者をはじめ、地理情報科学・GISの専門家、歴史

地理学や歴史学、文学を学ぶ大学生・大学院生、地域の歴史に関心を持つ方にとって、多くの示唆を与えるものといえよう。

第2編「京の人びとを震撼させた「火」の連鎖」では、まず平安から鎌倉時代までの「京都の大火」に関する年表が示され、火災の件数や月別平均湿度、平均風速などの指標を用いながら驚くべき火災の延焼力について言及している(第3章)。次に市街地の3分の1を一気に焼き尽くした大火災として「安元の大火」を事例に、大火の進行方向や実態について、当時の天候と大火との関係を検討している(第4章)。火災と言っても焼失地域も風向も異なるため、地図を用いた詳細な実態把握が有効である。次いで、鴨川を越えた火災として「建長元年の大火」を取り上げ、大火に関する記録12種類のうち7種類を用いて、大火の復原を行なっている(第5章)。ここでは火災の発生した5月の京都に吹く風の特徴について気象統計資料からの分析も実施され、火災が何度も広い範囲を焼き尽くしたようすを明らかにしている。分析結果によれば、烏丸小路を中心とした11の町では、いずれも12～13世紀の200年間において、12回以上の被災歴を持ち(第2章)、その都度市街地の復旧に努めてきたこと、市街地をよみがえらせることによって新たな都市活動を再生させ、以前にも増して都市を発展させる努力を続けてきたことは、現代に生きる私たちにとって、大いに参考になる事例といえる。

第3編「水」の襲来と京を流れた河川」では、まず8世紀末～14世紀末の記録から洪水の季節と回数に着目している(第6章)。平安京とその周辺における洪水の歴史について、「東京大学史料編纂所データベース」から10年ごとの洪水の回数とその変化を把握するとともに、頻発期における洪水の実態について記録を用いて分析している。次に、白河法皇と「賀茂河の水」について、白河法皇の生涯における洪水の頻度と、白河・鳥羽両地区・六条付近における院御所の地理的立地などから、法皇と「水」との間に横たわる運命的な関係について分析している(第7章)。次いで、平安京北郊における有栖川(第8章)、西洞院川と「小川」<sup>こかわ</sup>との関係についても(第9章)、記録から当時の地域のように復原し、詳細に検討できることに驚かされる。そして、第10章では同

時に溢れた京域内の河川として、貞和5(1349)年における堀川と鴨川の洪水を事例に、豪雨と洪水の実態について分析している。京の水害といえ「鴨川」が真っ先に思い浮かび、白河法皇のように、鴨川(賀茂河)に悩まされたという記録は平安京遷都以降数多く残されているが、第3編では堀川流域や西洞院川などの小河川が直接的なきっかけとなった内水氾濫的な洪水についても明瞭にされた点は、京都の都市史に大きな影響をもたらすだろう。

第4編「京を直撃した「風」の猛威」では、まず平安時代初期の8世紀末から室町時代前期の14世紀末に至る古記録の中から、台風に関する記事を抽出したデータベースを作成し、世紀別、期間別、旬別に京都への台風の襲来率とその変化について、わかりやすいグラフをもとに検討されている(第11章)。分析結果によれば、台風は前半の9～11世紀に比べ、12～14世紀に大きく増加したこと、また襲来期間を頻度から見て「発生初期」「盛夏期」「最盛期」「終焉期」の4期に分類できること、12世紀以降は台風の襲来する期間が長くなったことなどを明らかにしている。次に、前章に続き9～14世紀における個性的な台風について詳細な検討がなされている(第12章)。著者によれば、平安時代初期の8世紀末から室町時代前期の14世紀末の600年間余に、京都付近に襲来したと考えられる台風は310個に及び、このうち、襲来の年月日までを特定できるものは292個だという。本章では詳細に記録された事例やユニークな事例が取り上げられており、歴史時代の人びとの台風に対する基本的な知識や被害の実態を把握する方法、遠く離れた地域の情報を伝達する速さ(速度)、復旧に向けての姿勢と具体的な方法を明らかにしている。さらには、古記録から得られた文字情報を空間的な情報に変換し分析することによって、「台風本体の実質的な動きを推定することが可能になった」(324頁)と分析方法の有効性を示している。

第5編「京の災害と被害に学ぶ知恵」では、まず前章まで火事・火災、洪水・水害、台風による大風・風害などの項目に分けて、それぞれ個別に検討されてきた「災害」を複合的にとらえて検討している(第13章)。具体的には、洪水・旱魃の実態を比較するために、8世紀末～14世紀末の古

記録に見られる大雨・霖・洪水、旱魃・日照り・渇水等に関する記述を用いて、旬別や発生時期に着目した検討、1年の中の洪水と旱魃の関連性についての分析がなされている。分析結果によれば、794～1400年のうち、同じ年に洪水・旱魃の両者が記録されている年が全部で124回（全体の約21%）確認でき、かなり頻繁に発生していたことを明らかにしている。著者は「豊かな四季の変化に恵まれた日本は、歴史時代を通じて災害リスクもまた非常に高い、表裏一体の自然条件を常にかかえる地域でもあった」（351頁）と示唆に富む記述をしている。次に、終わらなき災害への対応と都市祭礼について、歴史時代における「土木工事」の実態に触れたのち、京に暮らした人々の「防災行動」、祈雨・止雨等の奉幣と平安京の祭礼、祭礼の実施と災害の発生頻度などを検討されている（第14章）。本書が出版された2020年は世界中で新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によるパンデミックが起きた年であり、京都をはじめ、日本各地で疫病退散を願って寺社仏閣にお参りする光景が見られたが、歴史時代における災害についても然りである。分析の結果、洪水・旱魃・台風の発生・襲来頻度と、平安京で広く行われてきた祭礼実施時期との間には、明確な関係のあることが明らかにされている。最後の第15章では、結論図が示され、「日常」と「災害発生時」との関係について説明されている。「歴史時代の災害から何を学ぶか？」という章タイトルにもあるように、この問いかけは私たち人類が生きるために考え続けていかなければならない重要な課題である。著者は貴族日記に記された膨大な量の文字資料＝文字情報を空間情報に変換し、過去のさまざまな災害を時空間分析する中で、いくつもの

新たな知見やヒントを提示している。

評者の力量不足で、著者の平易に書かれた文章や文字資料を読み解くセンス、説得力を持つストーリー、そして104点にも及ぶビジュアルな図版については十分に紹介できなかった。ぜひ手に取っていただければ幸甚である。また、評者は本書を携行し、京都をめぐることも試みたことがあるが、今では信じられないような場所で災害が起きていることに驚かされた。本書には現地を歩く際に利用可能な地図も多数掲載されているため、まち歩きやプラタモリ好きな方にもお薦めしたい。近年では、『京都の災害をめぐる』<sup>4)</sup>も刊行されており、京都を訪れた際には、災害について考える機会もあって良いかもしれない。

著者は「あとがき」で、「本書の大きな目的の1つは、高度な科学的分析をも踏まえた現代の知見と、過去の貴重な記録が語る実態とをつなげることにあった。さらにこの目的は、私たち1人1人が大きな災害に直面したときに、過去の経験と今の採るべき行動とを結びつける役割をも果たすことになるだろう」（382頁）と記している。著者のメッセージを胸に災害について学び続けていきたいものである。

（飯塚公藤）

#### 〔注〕

- 1) 吉越昭久・片平博文編『京都の歴史災害』思文閣出版、2012。
- 2) 吉越昭久編『災害の地理学』文理閣、2014。
- 3) 足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社、1994。
- 4) 橋本学監修・大邑潤三・加納靖之著『京都の災害をめぐる』小き子社、2019。